

---

# 4年前の友人

カツオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

4年前の友人

### 【NZコード】

N1884A

### 【作者名】

カツオ

### 【あらすじ】

私は遮断機の前にいた。自殺するため。その時、私は出会った。4年前の友人に。彼はいつたい何のために私の前に来たのだろう。コメディー作家のカツオが送る。生と死について語る恋愛小説。感動するかはどうかは別という事で…。

(前書き)

ちはつす！！カツオです。ついに完成しました。企画に一ヶ月、作成一ヶ月の超大作（！？）自殺したい。死にたいとおもう人はぜひ読んでください。そして自分の心の中を見てください。心の奥に何かの思いがあるはずです。では小説を楽しんでください。以上カツオでした。

12月21日、私は開かずの踏切の前にいた。

私が待つている物、それは、この路線で一番速い車両、桜見号を待つていた。

なぜつて？それはね、自殺するため。ビーセなら一瞬で死んだ方がいいでしょ。

10分後、聞き慣れた音が耳の中に入った。  
来た！！私の中に期待感が走る。

あの薄ピンク色のボディーに散る桜の花びら、まさしく桜耳号だ。  
私はちょっと後ろに下がり、タイミングを見計らった。  
なぜ私が自殺しようとしたか？

それはね、私の彼を麻奈美に取られたから、麻奈美は私より自分の方がかわいいってやけに私にライバル意識があるの。  
だから私の彼も…。そう思うと腹が立つ。だから早く死んでやろう  
と思つた。

今だ！！私は遮断機の棒をぐぐりとしたら、誰かにTシャツを  
引っ張られた。

「何すんの！！伸びるでしょ！！」

私がキレながら振り向くと、なんか見覚えがある顔。

「久しぶりだな。美樹。俺だよ、翔」

「ああっ！！翔だあ！！久しぶりい！！！」

翔は中学校時代の私の男友達の一人、男友達では一番仲が良かつ  
た。

「元気でいたか？」

「まあ…ぼちぼちかなあ…」

「そうか…」

「それよりも翔、かつこみくなつたね

「そうか？」

中学校時代の翔とは違い、男前になっていた。私の彼に、ちょっと似ていた。

そんな翔にも欠点がある。

それは忘れっぽい事。

中学校時代にテストの事を忘れて、その日の時間割を持つてくる程忘れっぽい。

「ところで翔はなんでこんな所に？」

「帰り道を忘れちまつて…」

「…」

ひょっこり私の部屋に来た翔はやけに私の部屋を見回つてゐる。

「すげー、リングのビデオがない」

「当たり前でしょっ！…」

「でも呪怨はある」

「すぐに帰つてね！」

なんか私、翔にだけにはいつもの私でいられる。なんか気が休まる。

「だから帰り道を忘れたんだよ」

「うつわあ！…すげえ料理だな」

「へへーん、どうだ

つて、なんで夕飯時までいるのよ…」

「うつわあ！…うめえ」

翔はうまそうに私の料理を食つてゐる。なんかすごいうれしい。

「そういえばや、なんで自殺しようとしたの？」

「気づいたか。

「…実はね…麻奈美いるでしょ？」

「ああ、やけにおまえに対抗意識があつた奴だろ。覚えてる」

「そいつに、私の彼を取られちゃつた。なんかメールで私の方が上だね。とか来てさ。もうすぐくムカついて、腹が立つてもう死んでやろうかと思つちやつて…」

私はなんか知らずにポロポロ涙を流してゐた。

まるでムカつくという感じを涙に変化してゐるのだろうか。一向に涙が止まらなかつた。

「おまえ、今、楽しいか？」

「…えつ？」

「今楽しいか聞いてんだよ」

楽しい。入りたかつたデザインの専門学校に入学出来た事、憧れのファッショントレーナーに弟子入り出来た事。どんどん夢へと近づいてるからすごい楽しい。私は涙ながらに語つた。

「なら死ぬな。死んだらすべて消えるんだぞ。親、今自分が住んでいる部屋、憧れのファッショントレーナー、悲しみ、苦しみ、喜び、夢。すべて消えるんだぞ。そんな事を自分からする奴におまえがなつてほしくない」

すべて消える。

そのためには自殺をするのだろう。翔がいなければ、私はそんな奴になつていただんだけ。そんなの…嫌だ。

「ありがとう、翔。なんか自殺がバカらしくなつたよ」

「そうだ、それがおまえだ」

それがおまえだ。そう。私は私を持っている。世界に一つだけの私。

「なんか偉そうな事言つちやつてごめん」

「ううん。今の翔。私と同じ年だとは思わなかつたよ。もしかしたら翔は私の人生の薬なのかも知れない。

私は泣きすぎを通り過ぎるほど泣いていた。

だつて涙は死ぬ限り消えない。

だから、私は泣けるのだからおもにっきり泣いちゃえ。そう思つたからだ。

…あれ?なんで私いつの間にかベッドにいるの?もしかしたら泣いたまま寝ちゃつたつてやつ!…あつ、学校は!…はあよかつた。冬休みつてやつだ。あれ? そりいえば翔は?

ふと天井から部屋を見てみると、翔はテレビを見ながらトーストと田玉焼きとシーザーサラダを食べていた。

シーザーサラダ？

「つて……あんた料理できるじゃん……」

「よお。起きたか」

12月22日、翔が料理してくれるそうだ。それまで寝ていいらしい。

翔は私の財布を掲げながら『すつげえの作るからなあ』って言ってたから相当すごいのだろう。

それから私は翔のために台所の食器を洗つた。本当はこれも翔にやつてほしかつた。

それからはもうダラダラしまくつた。

今考えてみると、4年間も会つてないから顔も変わつてゐるのに、よく分かつたなと私は思つた。

でも友達に変わつてないって言われたから変わんないのかあ。

12時頃に翔が帰つてきて、さつそく調理を始めた。

まずは米釜に米を入れて水を入れて放置して、カレーを作つてそのまま放置。

一時間後米を研いで炊飯し、カルパッチョを作つて、鳥と豚の唐揚げを作つて、バンバンジーを作つて完成。すつづじじじちそつだ。

「うつわあすご」!! いただきます

私はバンバンジーの鶏肉を食べた。うわあ……なんか懐かしい感じ、給食みたい。

「翔すごいじやん。おいしいよ」

「ありがとう」

「もしかして給食のおじさんになつたの？」

「ちげーよ!! バカ」

翔が机を叩いて、打ち所が悪くて腕を痛めたのを見て私は爆笑した。

「はあ、やっぱり翔はおもうい……」

思えば、中学に始めて入学した時。

友達が出来ずに寂しかった時に声をかけてくれたのが翔だった。翔も同じ小学校の人がいなかつたからか、私と翔は気が合つて仲良くなつたのだ。

「そいやさ、翔は今なにしてるんよ？」

「友達と美容院を作つた」

「へえ、誰ど？」

「塚田…」

「えつ…！…塚田君…？」

なんで自分の仕事場の場所を忘れるんだよとつっこみたかつたが、そこは抑えて食いついた。

塚田君は私が中学になつて始めての片思いだつた人。

翔とすゞしく仲良かつたから翔に好きな食べ物を聞いてそれを手作りしてプレゼントした事もある。

「ねえ、塚田君元氣？」

「ああ、元氣だよ…………ああつ…………」

「…何よ…？」

「やべーやべー、手紙渡すの忘れてた」

すると翔はポケットからくしゃくしゃの手紙を出した。私が開いてみると、こう書いてあつた。

『華原さん。入学時から好きでした。もしこんな俺でもよかつたらつきあつてください。お願いします。塚田』

ガーン。私の心中のガラスが何枚も割れたような感じになつた。何で塚田君も翔なんかに渡すのよ。翔が忘れっぽいの一番知つてゐるのに…。

私は崩れた。

「「めん…！」めんなさい…！…すいません…！」

「ふざけんなよつ…！…あんたの欠点で私の恋愛をぶち壊すんじゃね…よ…！…塚田君なんて言つたんだよ…？」

そこらへんにあつたクッションで翔を叩きながら私は聞いた。

「…はあ…オレ、振られちゃつたなって言つてた

「ふざけんじやねーよ…つたくよ…」

「ほんじめんなさい…すいませんでした…」

「はあ。もういいや」

私は翔を見損ないながら、メチャうまい翔の手料理を食べていた。

「あつ…！」

「今度は何…？」

「明日、同窓会だ」

「はあ…？葉書もらつてないよ」

私が焦りながら探していると、一枚の葉書が出てきた。そこには

同窓会についての通知だった。

「あつた」

「なあ、ついでだから一緒に行こうぜ」

「でも私出席する連絡しないよ」

「何言つてるん？代表は俺だぞ…」

「まじで？」

12月23日。3　1の同窓会の日。集合は午後7時に池袋の貸切レストランだ。

午後5時半。

「翔！-早く！-電車に遅れちゃう…」

「わあつてるわい！-いい服が見つかん…あつたぞー…」

「いいからさつさとしろよ…」

「へいへい！-お待たせ」

午後5時40分。私と翔は出発した。

みんなどうしてるかな？和香とか、かあるとか愛とか。

塙田君とか。あと麻奈美。あいつも来るのか…。

「なあ、麻奈美とか来たらやだよなあ」

翔が私の心を読みとつてるかのようと言つた。

「うん。あいつクラスの集まりとかいつも来てたからね」

「まあ来たら俺がなんとかしてやるよ

「翔ほんとありがとう。ほんと感謝してるよ」

私は、別に翔でもいいかなって思い始めた。てか学生時代から内面的にすゞくモテてたからなあ。

池袋に着いた。

翔がいけふくろうならパクれるつて駅構内で言つたら事務室まで連れられてしまいマジ焦つた。

「ふざけんじやねーよ。クソマッポ！パクれるつて言つただけで事務室まで拉致るんじやねーよ。遅れそつじやん」

「あんたならやりかねないでしょ！！！」

そういうしてるうちに七時になつてしまつた。

私はピンチになつてあたふたしてしまつた。

「翔！もう七時だよ…」

私が交差点の真ん中で言つた時、翔はいなかつた。

私はコンビニでも行つたんかなあと思つて立ち止まつてたら、クラクションが聞こえて、赤だと気づき走つた。

やつと貸切レストランについた。レストランの前に二十人ぐらいの人が集まつている。

私が近づこうとした時、『おおっ！－－－！美樹！－』と聞こえたので走つていつた。

「美樹、久しぶりだねえ。全然変わつてない」

「愛も全然変わつてない。人つてそんなに変わらないんだね」

「うん」

「あつ、でも翔はすぐ変わつたよ」

「…えつ？美樹、翔に会つたの？」

急に愛がマジ顔になつてしまつた。周りの人もみんな静かになつて私を見た。

「うん…。なんか帰り道忘れたんだつて。あいつ本当にバカだよね

え

「ねえ美樹、本当に翔と会つたの？」

「ええつ！？信じてよ。すげえ料理上手かつたよ」

すると、塙田君がやつてきた。塙田君も変わつてなくかつこよかつた。

「おーーー！塙田君、変わつてないね」

「マジで会つたん？翔と…？」

「そうだよ。さつきまで一緒に行つてたんだから…」

みんなずつと静まり返つていて。

車が走つてゐる音と近くの「トパートの放送しか聞こえない。

「美樹、実はね…」

「…えつ？」

実は翔は事故に遭いそうな子供を助けて死んでしまつたのだ。

しかもそれは私が翔を最後に見たあの交差点で、塙田君と始めた美容院も池袋にあり、翔はそこで住み込みで働くとして出かけてたときに起きた事故だつた。

それならば仕事の場所も帰り道も途中までしか知らないのだ。

「うそ…」

私は崩れた。

幽靈を家に入れて、幽靈にご飯を作つて、幽靈が作ったご飯を食べていて。

そんなことじやなく、私は生きる事を学んだ。

その教師が私の友達であり死んでいる。

なのによく説得力があつた。

本当は自分だつてこれから楽しい事があるのに全て消えてしまつたんだ。

子供のために自分から車道を飛び越して。

それを子供を助けてくれたヒーローといつてたが、ヒーローだつて

実際は自殺みたいなものだ。

自分から特殊な機能を持つた怪獣に立ち向かい覚悟を決めて怪獣に立ち向かう。

これもある意味自殺なんだ。

翔というヒーローは立ち向かつたんだ。

子供を守るために車といつ怪獣に。

そのために全て消えた。

翔は自分を捨てた。

もう苦しむ事も喜ぶ事も悲しむ事もできない空間に自分を捨てたのだ。なのになんで、私だけに…？

それは第二の自分を作らせないため。

自分から車に立ち向かって死んだ自分なんかに私やほかの人たちになつて欲しくなかつた。全てを捨てて欲しくなかつた。

「そういえば、昨日、翔が夢に出てきたんだ。俺を見た瞬間に土下座してきて、『遅れません。今渡してきた』って。実は翔も美樹の事が好きだつたんだろうな」

「翔…翔…」

私は泣きまくつた。

翔の分まで泣きまくつた。

永遠に出せない涙を今ここで私が出してあげたいと思つたから。

同窓会が終わってから塚田君の美容院に行つた。

そこの一階に翔の住むはずだった部屋があつた。

その部屋は翔の荷物が端に置いてあつて、窓際に翔の遺影があつた。

私はそこに座つて、拝んだ。

とゆうか祈つた。翔、助けてくれてありがとう、これからもよろしくと。

12月24日。

今日はクリスマス。

私は今、踏切の前でクリスマスは誰と過ごすか悩んでいる。

そのとき、桜見号が見えてきた。

私は、遮断機をくぐろうとしたが、やめた。

またぐぐろうとしたら翔に会えるかなつて思つたりして。

でももういい。私は翔に学んだのだから生きる事を。

私はため息をついた。

「かおるでも呼ぶか」

私は遮断機が上ののを待つた。

翔を休ませるために。

(後書き)

どうでしたか。心の中の何かを見つけたことはできましたか。自殺は犯罪よりも罪が重いと思います。色々な苦労をかけ、色々思ひがつまつてできた自分の命。それを無駄にするのはどうかと思います。死にたいと思うなら、自分の生活をよく見直してみましょう。その奥にどんなに小さくても楽しい事はあるはずです。ぜひ、それを自分から無くすような人にはなってほしくないです。以上、カツオでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1884a/>

---

4年前の友人

2010年10月28日03時31分発行